



『随行記録 廣池千九郎博士の教え』

井出 大 著 本体1,400円+税

お求めは
巻末の専用ハガキ、
あるいは右のQRコード
(オンラインショップ)から



この春、もっと幸せになる

廣池千九郎エピソード 幸福をもたらす力とは

花咲じいさんの教え

もっと、幸せになりたい。ただ具体的に何をどうすれば「もっと幸せ」になれるのかと問われると、よく分からない人が多いのではないのでしょうか。

同じくらいの収入で、健康状態も変わらないのに、不幸を感じる人もいれば、幸せいっぱいの人もあります。望んだ仕事や人間関係を手に入れることができたとしても、「ないもの」を数え続ける限り、次なる不平不満が膨らんでいくことでしょう。「花咲じいさん」という童話をご記憶でしょうか。ある山里で、傷ついた子犬を見つけ、わが子同然に育て始めた老夫婦。あるとき、「ここ掘れワンワン」と犬の鳴く場所を掘り返したところ、大判小判を手に入れます。それを妬んだ隣の老夫婦は、無理やり犬を連れ去り財宝を探させますが、掘っても掘ってもガラクタばかり。犬は殺され、悲しんだ飼い主夫婦がお墓をつくったところ、傍らに植えた木が一夜で大木に成長します。その木で臼を作った餅をつくると、今度は宝物があふれ出てきました。それを妬んだ隣の夫婦が臼を奪って餅をつくものの、汚物しか出ず、

臼は燃やされてしまいます。

同じことをしても、正反対の結果になる二組の老夫婦。最後は、臼の灰を撒いて桜を満開にした老夫婦に対し、隣の夫婦の撒いた灰は、通りすがった大名の目に入り、罰を受けます。

同じ「行い」をしているのに、どんな幸せになる夫婦と、不幸が重なる隣の夫婦。明暗を分けた二組の「違い」はどこにあったのでしょうか。

それはきつと心の働かせ方の違いでしょう。優しい老夫婦は犬や他人を思いやり、周囲を喜ばせるために心を働かせているのに対し、隣の夫婦は自分の欲望を満たすただけに心を働かせています。

よい心でよい行いをコツコツ積み重ねていけば、人はきつと幸福という宝を手にすることができると。「花咲じいさん」の童話は、そのことを後世に伝えようとする、先人からのメッセージなのかもしれません。

幸福をもたらす品性

総合人間学「モラロジー」では、人の幸福は、「品性」の向上に従って実現されるものと考えます。つまり、幸せになる

道とは、日々よい心づかいと行いを積み重ね、「品性」を高める生き方にこそある、ということなのです。

では日常生活の中で、具体的にどのような努力や工夫をすれば、品性を高めていけるのでしょうか。晩年の廣池千九郎に随行した井出大氏は、昭和十年に開設された学校「道徳科学専攻塾」(麗澤大学の前身で、廣池がどのような教育を重視したかについて、こう語っています。

「人間は『習性となる』という性格を持っています。よいことを考えていると、だんだんと細胞がよいことを考えるようになっていくような習性を持っているのが人間の特性です。これを先生は大切にされています。

たとえば、お風呂が汚れていると、後から入ってくる人が不愉快であろう。気持ちよく入っていただきたい、という気持ちを含めてごみを掬い、浮いた髪の毛を掬いなさい、そのごみを掬ったあなたが救われるのですよ、とおっしゃっているわけですが、このことが少しも分からないのです。ごみを拾うことが一体何になるのだらう、トイレの汚れを掃除することが一体何になるのだらうと思っ

まいがちです。

日常茶飯事、絶えず行なっていることに真心を込めることができなかったならば何もならないのです。ご飯を炊くにも、おかずを作るにも、『どうぞ、これで主人が子供たちが健康で、神様のお手伝いができますように』と祈ってやりなさいというのが先生の教育でした。(略)このように日常生活のすべてにおいて、道徳を実践させようとしたのです。これが、先生ご在世中の専攻塾の姿です」(井出大『随行記録 廣池千九郎博士の教え』モラロジー研究所)

専攻塾の講堂には「修天爵而人爵従之」(天爵を修めて人爵これに従う)という額が掲げられていました。「人爵」とは、人間から授けられる位であり、地位や財産を指します。一方、「天爵」とは天から与えられた位であり、道徳を実行することで培われる人格や品性を指します。

地位や財産を得ることばかりに執着し、道徳的努力を怠れば、童話の隣の老夫婦のように人望やつながりを失い、自ら不幸を招きかねません。品性が高くなればその程度に応じて、必ず自分の要求は達せられる、品性向上に努めなさい。廣池はそう説くのです。

(本誌)